



つくば機能植物イノベーション研究センター 形質転換植物デザイン研究拠点 研究セミナー（69）

<https://us02web.zoom.us/j/84594662911?pwd=ZDEONXBuakY0NE9Rb1ZqdXM3clU3UT09>



日時：2022年6月16日(木) 17:30 -

場所：Zoom オンラインで実施

Zoom ミーティングは、下記 URL、または QR コードからアクセス、ID・コードを使ってご参加ください

<https://us02web.zoom.us/j/84594662911?pwd=ZDEONXBuakY0NE9Rb1ZqdXM3clU3UT09>

ミーティング ID: 845 9466 2911 パスコード: 849949

作物育種の実際とゲノム情報の利用に向けて

---農研機構のイネにおける取り組みを中心に---

田中淳一

農研機構 作物研究部門・上級研究員

筑波大学 NARO 連係先端農業技術科学サブプログラム・教授

冒頭、世界の作物育種の食料生産に対する貢献について解説する。続いて、実際に農研機構でどのように育種が実施されているのかについて紹介する。

また、近年、安価にゲノム情報が得られる時代になったことを前提に、それをどのように作物育種の成果に結びつけるのか、農研機構のいくつかのとりくみについて、イネを中心に紹介したい。具体的には以下を予定している。

- 1) ゲノム情報の表示と、そこからの有用遺伝子のタイピングの重要性と課題
 - 2) 通常の育種法では、約 10 年で 2 つの材料（品種）がもつ有用遺伝子（有用アリル）を集積するのに対し、4 つの材料がもつ有用遺伝子を初期世代で集積した選抜母集団を作出して選抜する育種法
 - 3) 年間 4 世代、次々にかき合わせながら有用遺伝子を集積できる育種法
- これらを前提に、新たに発見・開発される育種素材との関わり方などについても議論できればと考えている。

キーワード：作物育種、ゲノム情報、アリル推定、高速世代促進、循環選抜

世話人：遺伝子実験センター・津田